

雨の日に



宇佐美耕仁

梅雨は梅の毒を濯ぎます

では毒はどうなるのでしょうか

毒は地下水脈を流れ

井戸に溜り

人間は知らず知らずの内に

朝に昼に晩に

飲み込んでいるのですよ

毒を

あと一寸、そう思つた瞬間に私は目を覚ました。

葬式の日の早朝、私は覚醒した後も暫く天井を眺めていた。

自分が見ていた夢の内容を反芻しながら。

ようやく布団から起き上がり、カーテンを開ける。空は曇っていた。しかし十分に明るい。喉の渴きを覚え、台所に向かう。まだ誰も起きていないのか、家はしんと静まり返つていた。

蛇口を捻り、硝子製のコップに水を注いだ。一昨日みた末期の水の光景を思い出す。湿らせた脱脂綿が故人の唇に触れるたびに、その唇が艶めかしくなる様は少し気味が悪かつた。

現世で最後の水は美味しいのだろうか。コップに溜まつた水を飲みながら、そんなことを考えていた。

深海から浮上する。そういう夢を見ていた。

雪が降り積もる海底から浮き上がる。

鯨の死骸が眠る海底から浮き上がる。

水銀の重しを外しながら浮き上がる。

暗闇は徐々に失せ、浅葱色の光明が差し込む。

あと数米で海面、というところまできた。

淀んだ空氣。

高い湿度。

微かに漂う黴臭さ。

朝から雲に覆われていた空は、昼前にはいよいよ鉛色に染まり、いつ雨が降り始めてもおかしくはない状態であった。梅雨前線はこの地域に停滞し、太陽は厚い雲にその姿を隠していた。梅雨は己の憂鬱を隠すつもりがないかの如く振る舞っていた。私は斎場のロビーのソファに座りながら、窓越しの曇天眺めていた。上空の大気は乱れているのであろうか、随分と忙しく雲は蠢いていた。

雲を見るのも飽きたのでロビー内を見渡す。喪服を着た人々が群がっていた。皆が一様に黒い服を着ている光景は、室内に流れる神妙なBGMと相俟つて、どこか滑稽であった。香典の受付に何人か並んでいたが、恐らく彼等の香典は葬儀の手引書の類に従つて、金額を決められたのであろう。

「やあ、××君。久し振りだね」

喪服の群れの中から染み出てきた中年男性が私に話しかけてきた。全く面識が無い人であった。否、こちらが失念しているだけか。多分、親戚であろう。

「お久し振りです。おじさん」

そう言つて軽く一礼した。

「暫く合わない間に随分と穀慙になつたね。前はもう少し、こう、無邪気だったのにね」

私の向いに置かれたソファに座つて、彼はそう語りかけた。

「はあ、そうですか、と適当な返事で誤魔化した。

「そういえば、お父さんとお母さんは……。××君のご両親にも挨拶をしておきたいのだが」

私は周囲を確認したが両親は見当たらなかつた。

「すいません。僕もよくわからないです」

「そうか、なら仕様が無いね」

探してみるよ、と彼は席を立ち、再び喪服の群れの中に溶けていった。

彼が誰であったか記憶を探つているうちに、斎場の従業員が、葬儀が始まるので式場に入るよう、という趣旨の放送を流した。私は喪服の群れに加わり式場に移つた。

式場は二百脚ほどの椅子が置かれており、そのうちの約半分は既に埋まっていた。私は両親を探したが何処にも見当たらなかつた。先ほど会話をした男性も式場にはいないようであった。仕方が無いので、前に詰めるように席についた。

正面には祭壇が設置され、その両脇は色鮮やか花で装飾が施されていた。遺影は祭壇の中央に置かれ、故人は無表情のまま、こちらをねめつけていた。

写真と目が合つた気がして視線を逸らした。

はて、遺影に写つたあの人は誰であつたか。両親に言われるまま連れてこられた所為で、誰の葬儀かも聞いていなかつた。

両親に連れてこられた？

本当に？

私はどうやつて斎場に辿り着いたのであつたか。

思い出せない。

私は何故ここにいるのか。

私は何時からここにいるのか。

葬儀は型通りに進行していった。そして遺体を火葬場に運ぶ段になつた。

「出棺致します。皆様、故人との最後のご挨拶を……」

喪服の人々が棺の周囲に集まり始めた。

みんな虚ろな表情で、どれもこれも同じ顔に思えた。

私も棺の脇に立つ。

棺の蓋が取られ、死に装束を纏つた遺体が現れた。

故人は花が敷き詰められた棺のなかで、胸の上で手を組まされた状態で安置されていた。

死体であるはずなのに今にも動き出しそうなほどの生気を宿している。

逆に、死体を覗き込んでいる人々のほうが、死人のようであった。

暫くして蓋は閉じられ、棺は斎場の外へと運び出されていく。斎場の出入り口が開けられた。

雨の音を聞いた。

雨の香を嗅いだ。

喪服の人々は黒い傘を差して火葬場に向かう。

私は彼等が一人また一人といなくなつていく様を人々、眺めていた。私は黒い傘を持つていなかつた。

どれほどの時間が経つたのか。

何時の間にか外は真っ暗で。

何時の間にか斎場には誰もいなくて。

私は一人で雨が止むのを待つていた。

空に蟠る雨雲をぼんやりと見つめながら。

海底に沈んでいく。そういう夢を見ていた。

遥か上方の海面を船が横切つていく。

蚩鳥賊の群れ、櫛水母の群れを通過し、抹香鯨がわきを掠め

る。

どこまでも、どこまでも落ちてゆく。

どこまでも、どこまでも落ちてゆけばよいのか。

薄明は既に尽きた。渺漠たる海は私を静かに包み込む。